

市史「史料編」編さん講演会報告

昨年8月25日に、県立図書館レクチャールーム（後河原）で、第10回講演会「防長の杣山からひろがる材木の道」（講師 中世専門部会 伊藤幸司 専門委員）を開催しました。次回は、現代専門部会が担当する予定です。

《講演の要旨》

俊乗房重源が、源平の争乱で治承四年（一一八〇）に焼失した東大寺を、周防国徳地の材木を使って再建したことはよく知られている。では、なぜ、重源は東大寺再建の総責任者に任命されたのであろうか。さらに、なぜ、重源は周防国徳地の材木を東大寺再建に利用しようとしたのであろうか。二つの疑問点がある。

重源の事績として注目すべきは、南宋に渡った経験を挙げることができる。当時の日本と中国は、博多と寧波（明州）を結ぶ「大洋路」で密接に結ばれており、いわゆる日宋貿易によって人や物の往来がなされていた。重源は、寧波郊外にある中国仏教の

によると、重源は帰国後、寧波郊外にある阿育王寺舍利殿の修造に周防の材木を寄進している。

材木は、当時の日本の主要な輸出品であり、とりわけ「櫨木」（櫨）が重宝されていた。南宋では北方民族（金）の侵入による開封から臨安（杭州）への遷都、大寺院建設などで、材木が枯渇していた。臨安から山口・九州までは直線で約千キロであり、四川など大陸の材木供給地より近かった。南宋にとつて、材木不足を解消するためには、大洋路で日本から輸入した方が効率的だったのである。日本の材木は、良質で安価なため南宋で注目されていた。

当時、大陸へ材木を寄進する板渡は頻繁に行われており、柴西は天童山景德寺の千仏閣再建のために大船で良材を送っている。また、円爾は径山万寿寺が焼失すると、材木千本を大陸に渡しているが、これは徳地の材木であったと考えられる。

以上から、重源は入宋僧として大陸の最新の仏教文化や技術に触れただけでなく、中国の阿育王寺舍利殿を再建するなど、大陸とのコネクションも持つ僧侶であったことがわかる。この点が、最新の大陸モードでの東大寺復興をもくろんだ後白河院の意図に適っていたのであり、それゆえに彼は還暦を過ぎた高齢でありながら、東大寺再建の総責任者に抜擢されたのである。

また、日本の主要な輸出品であった材木は入宋僧重源の知るところであり、彼はその優良な供給地として徳地（防長の杣山）の存在も熟知していた。だからこそ、重源は徳地の材木を東大寺再建に利用したのである。

徳地の材木は、東大寺を復興しただけでなく、中

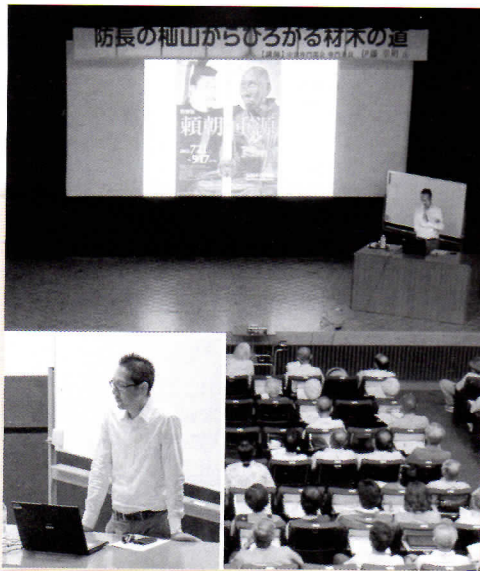
国大陸にまで輸出されていた。とりわけ、南宋ではとても重宝され、さまざまな寺院の再建に活用されていた。徳地の材木は、日本国内のみならず、より広い世界とつながるダイナミックな歴史的な魅力をもっていたということを強調しておきたい。

また、東大寺再建に際して、重源は大陸の技術を取り入れるために、博多にいた南宋の技術者である陳和卿を招聘している。陳和卿の衣食をまかなう給領地が宮野であった。徳地から佐波川流域には阿弥陀寺、月輪寺、関水、僧取岩、石風呂など、重源に関係する遺跡が残されている。

ところで、重源が再建した東大寺は、最新の大陸モードを導入した天竺様（大仏様）という異形のデザインであった。これらの建物は、戦国時代の戦乱で焼失してしまったが、南大門だけは現存している。南都仏教（旧仏教）の代表ともいえる東大寺が、最新の大陸仏教の影響を前面に押し出していたのである。

このほか、防長の杣山については、佐波川流域のみならず日本海に流れる阿武川のルートにも注目する必要がある。阿武郡には、材木供給地として阿武御領と呼ばれる皇室領があった。阿武の杣山の材木も、東大寺再建に利用されていたと思われる。

中世には、阿武川河口の左岸地域は樺から橋本川河口までを樺浦といっていた。近隣の樺八幡宮や、山頂に樺の太木があったという歓喜寺（現在の太照院）は、樺浦に入港する船からの目印であった可能性がある。阿武の材木は、阿武川を経て樺浦に集積され、さらに博多から中国大陸へ輸出されたのではなからうか。萩市大井にある宋代の船の礎石である蒙古礎石の存在も、さきの推測を補強するものととらえることができる。



聖地の育王山や天台山にも足を運んでいる。
重源は、承安元年（一二二二）博多湾今津の誓願寺の本尊を造る際、周防の杣人から材木を調達していた。さらに「南無阿弥陀仏作善集」